

位置と環境

旧成川火口の西壁に立地している。遺跡地は標高38～73メートルの丘陵が東へ張り出した尾根の先端部南斜面で、地層は池田湖火山灰の上に開聞岳火山灰が堆積してできている。縄文時代、弥生時代、古墳時代にわたる複合遺跡である。

調査の経緯

昭和32年（1957）山川港埋立工事用採土工事により発見され、数日間の調査がされた。

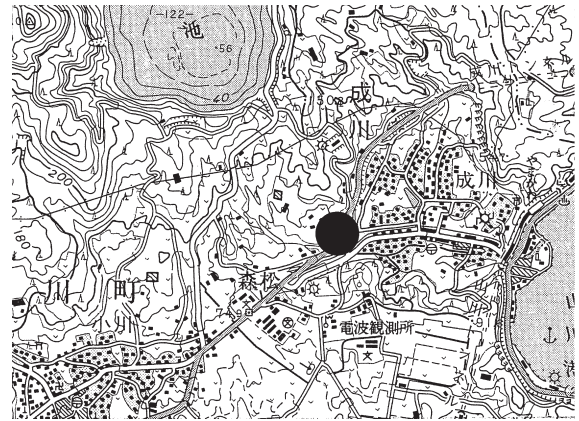
翌33年に文化財保護委員会（現文化庁）が発掘調査を行い、その後昭和55・56年には国道228号線成川バイパスの建設に伴って県教育委員会が再度、発掘調査を行った。

遺構と遺物

最初この地に出現したのは、弥生時代中期後葉の祭祀遺跡である。尾根の南東端山麓に、100㎡余の地積を占めて、輝石安山岩質の板石3基を、根固石を用いて強固に立て並べ、その南側には幅1m、長さ5m余の範囲に安山岩礫を配している。立石には、それぞれ地元の山ノ口式土器とともに、北九州から移入された丹塗り研磨した須玖式土器が供献されている。これは祭祀遺跡と考えられるもので、同様な例は、枕崎市松ノ尾遺跡や対岸の大根占町山ノ口遺跡にもある。

開聞岳火山の第二次爆発の時期は、この祭祀遺構を形成した直後である。根固めの立石が3基ともに中ほどで折損転落しているのは、第二次爆発の衝撃によるものであろう。

昭和55年の調査では、祭祀遺構の西南に隣接する地域で山ノ口式土器を出土する竪穴住居跡8軒が発見された。これが祭祀遺構を残したもとの集落であろう。竪穴住居の形態は隅丸方形が主体で、ほかに円形のものが1軒ある。床面積は10～35㎡程度と大小さまざまだが、このなかには周辺にベッド状の高まりのあるものも4軒ある。中央に炉穴のあるものもみられるが、柱穴の配置ははっきりしない。住居内外から多くの土器・石器などが出土している。



第1図 成川遺跡の位置

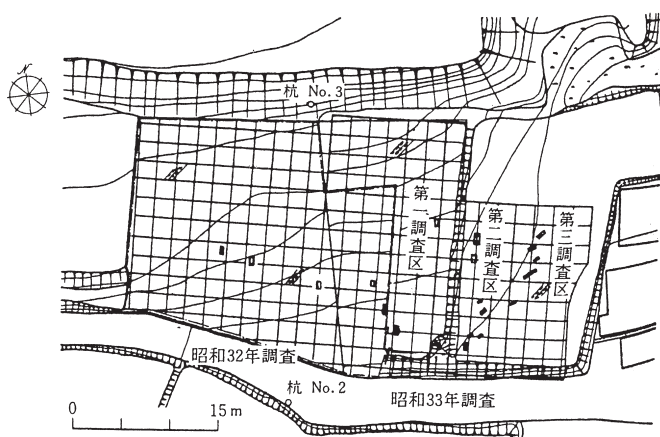
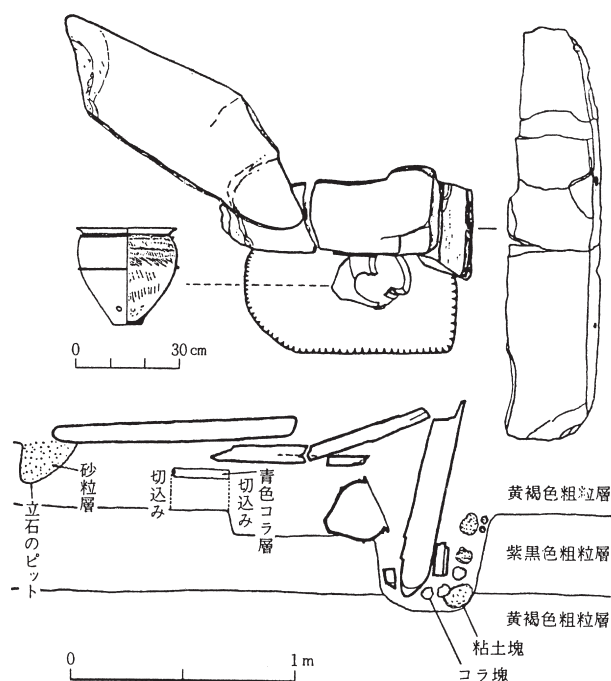
土器は在地の山ノ口式土器を主体とするが、北九州系の丹塗土器、瀬戸内系の凹線文土器など外来系のものもある。石器には磨製石鏃・磨石・石剣・砥石などがあり、ほかに有孔・容器状などの軽石製品もある。

祭祀遺構に続く第二の時期には、弥生時代後期の埋葬が行われた。昭和32年の調査では、祭祀遺構の西に隣接する約130㎡の地域に、T字状立石と弥生時代後期の甕棺墓（単棺）、土墳墓が発見された。この時期には、中期の折れた立石を模倣して、2枚の板石を組み合わせてT字状の立石を創作したのである。北九州甕棺葬の伝播の南限にもあたっている。

第三の時期は古墳時代にあたり、集落共同の埋葬が行われた。墓域は第一、第二期の地域もとおりこんで尾根の南斜面に広がり、面積は1.5haに達した。

4世紀から6世紀にいたるもので、墓墳が143基、被葬者の数は348体に達する。広い範囲がこわされていることから元来はこの数倍の被葬者がいたものと思われる。墓域の東南部に20基あまりの立石が設けられているために、「立石墓」とよばれている。

埋葬は土中に遺体を埋めたのち、地表面に土器や石器を供献するというきわめて特異な方法で行われ、それぞれの被葬者個人に対する副葬品はほとんど見られない。141基の土墳墓が発見された昭和56年の調査では6基だけに鉄器が副葬されており、鉄剣1が1基、鉄鏃1が4基、鉄鏃2が1基である。頭部に朱のまかれた墓もあった。供献には土器・鉄器がある。土器では壺、高杯、埴、鉄器では剣54・刀12・矛3・鏃150・大型鏃9・異形鉄器6など武器が



第2図 成川遺跡の立石とその分布

多く用いられ、装飾品は金環が1点あるのみである。ほかに斧1・刀装具・刀子・やりがんななどがある。このなかで剣に蛇行剣・曲身剣が多く含まれるのは特異である。ともに全国各地で見られるものではあるが、多くは1点の出土であり、ここみたいに複数出土しているのは珍しい。

成川遺跡では348体の人骨が発見されているが、成人骨が多い・男性が多いという特徴がある。人骨を調査した金関丈夫博士は「身長低く頭形短く、顔面が低いという点で、成川遺跡人は北九州地方の弥生人とは非常に異なっている」と述べているが、隼人を異人とした当時の記述と一致するものである。

1980年の調査では、墓域の南隣接地の下層で縄文時代後期の指宿式土器に伴う遺構と多量の遺物、最下層から縄文時代中期の春日式土器に伴う遺構と遺物が検出され、縄文時代前期の土器（曾畑式・深浦式）や中期の土器（阿高式・岩崎下層式・並木式）も若干出土している。土製品として円盤形土製品が出ている。石器には片刃を含む磨製石斧27、磨石44がある。石製品には块状耳飾を再加工した垂飾、有孔軽石製品などもある。

特徴

丘陵につくられた古墳時代の土坑墓群である。

南九州特有の多くの土器・鉄器が出土し、成川式土器の標識遺跡である。

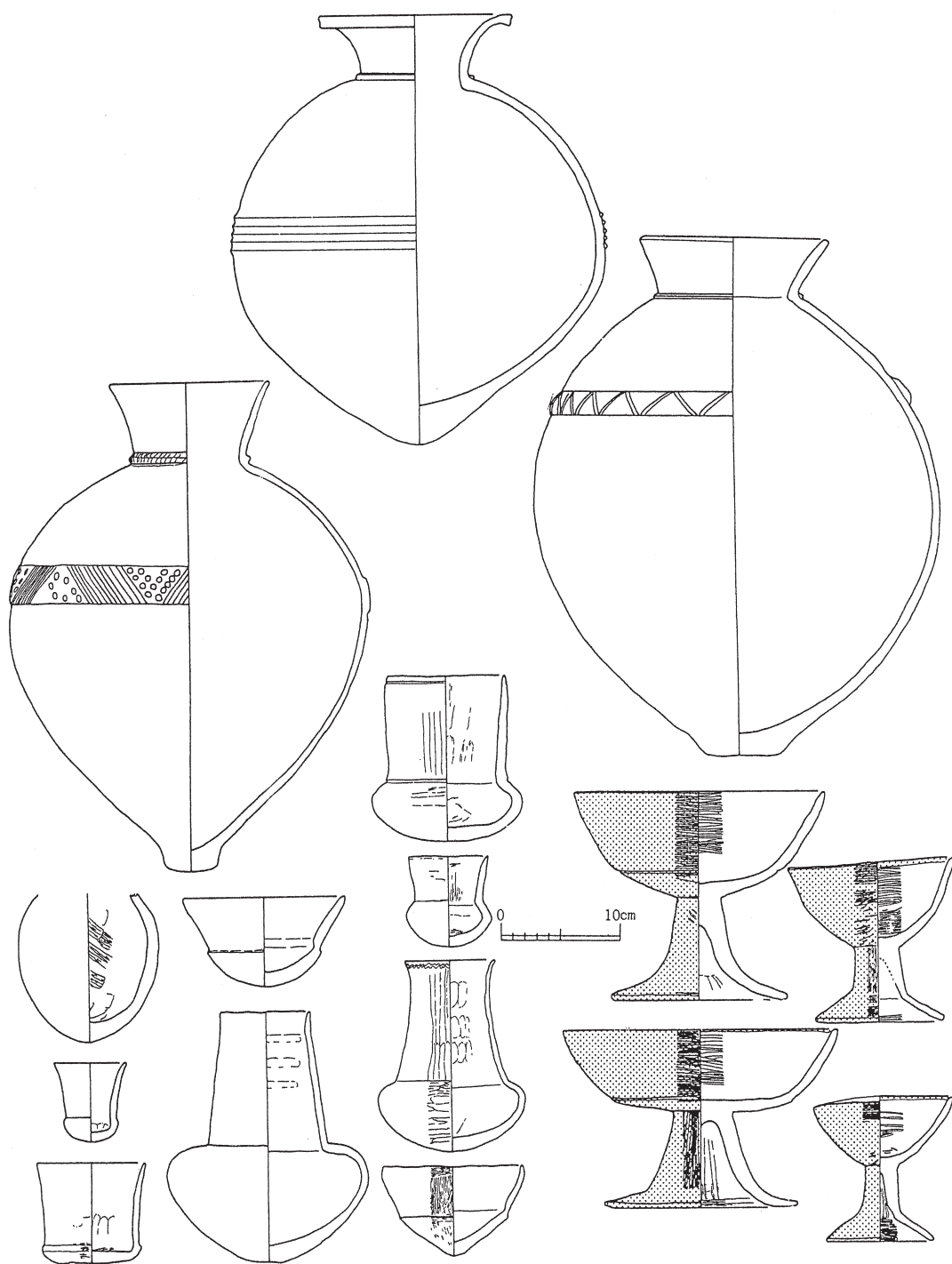
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県歴史資料センター黎明館・鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管され、その一部は黎明館で常設展示されている。

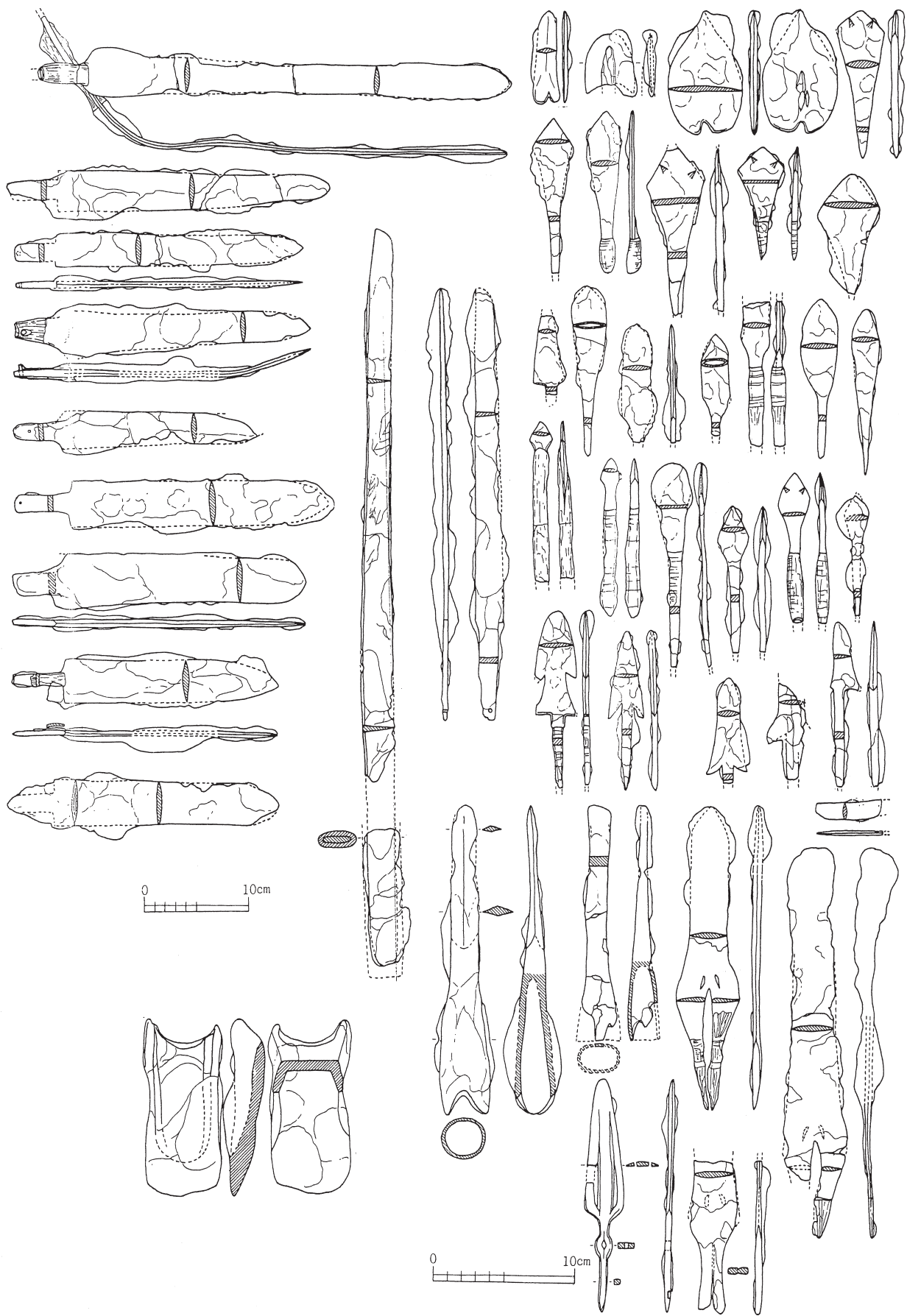
参考文献

- 河川貞徳・河野治雄・重久十1958
 郎「成川弥生式群集墓」『考古学雑誌』第43巻第4号日本考古学会
 斎藤忠・田村晃一他1974「成川遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』第7文化庁
 鹿児島県教育委員会1983「成川遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』24

(河川貞徳)



第3図 出土した土器



第4図 出土した鉄器